



# 教員志望学生の進路選択時における地域移動を規定する要因：家族に対する規範意識に注目して

著者	富江 英俊
雑誌名	教育学論究
号	10
ページ	97-104
発行年	2018-12-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00027479">http://hdl.handle.net/10236/00027479</a>

# 教員志望学生の進路選択時における地域移動を規定する要因

— 家族に対する規範意識に注目して —

Factors regulating regional movement at the time of choosing course of students intending school teachers

— Focusing on norm consciousness for family members —

富 江 英 俊 \*

## Abstract

In this research, focusing on the phenomenon of regional movement at the time of university admission at university entrance and university graduation, I investigate the cause of the regional movement. Especially I pay attention to consciousness about family. The survey in this study covered nine people who were 4th graders of Tottori University in 2017. The following factors were clarified as factors that regulate regional movement. The most obvious tendency is that when they enter the university, they move to universities other than their home country, depending on the degree of difficulty of the university entrance examination, and when they get a job after graduation, the family's intension tends to be large and returning to the place of origin there were.

This study shows that those who become teachers positively evaluate their families and their hometown. Such consciousness will be communicated to pupils as values in daily teaching practices (for example, moral education) conducted by teachers. Such an assessment includes the risk of being considered “conservative”. On the other hand, there may be an interpretation that recognizes such normative consciousness positively as “it is necessary value for the survival of non-metropolitan areas”.

キーワード：教員志望学生 地域移動 非大都市圏 規範意識

## はじめに

本研究は、地方国立大学に在学中の教員志望者<sup>1)</sup>の大学入学時・大学卒業時の地域移動という現象に焦点をあてて、その地域移動の原因をさぐる。とりわけ家族への意識に注目する。

非大都市圏の高校生・大学生の進路選択に伴う地域移動について、これまで多くの研究が重ねられてきた。一つのパターンが、非大都市圏には高等教育機関が少なく、居住地が大都市圏か否かによって、大学進学機会が影響を受ける、その結果大学卒業後の人生においても収入や地位において差が出てくるという、「機会均等」「教育の不平等」に関する研究である。(小林 2009、朴澤 2016など) ここから派生したパターンが「ローカル・トラック」研究であり(吉川 2001、樋田大・樋田有 2018など)、また近年は「地方に生きる若者の文化」といった文脈で

も、問題関心が近い研究がさかんになっている。(阿部 2013、轡田 2017など)

これらの研究を参考にしつつ、本研究では、教員志望の大学生に調査対象を絞る。教員という仕事は、企業が少ない非大都市圏においては、相対的に収入や地位が高く、公務員であることが多いため安定しているとされる。転勤があるとしても県内だけであり、その県内で一生を過ごそうとしている者には、人気の高い職業とされている。(石井・宮本・阿部編 2017など) 他に人気がある職業としては、県庁や市役所などの地方公務員、地方銀行・JAなどの金融機関、看護師・理学療法士などの医療関係などが考えられるが、これらの職業は必ずしも大学を卒業していなくても就けるのに対して、教員は4年制大学(または短期大学)を卒業しており、「地方のエリート」と言ってよいポジションにいる者も少なくない。

\* Hidetoshi TOMIE 関西学院大学教育学部教授

今日の日本社会の構造として、入学試験において難易度が高い大学ほど大都市にあり、その学歴に見合うような収入や地位がある勤務先（東証一部上場企業など）も同じく大都市に集中している。そのため、非大都市圏においては、「優秀な人材ほど流出し、卒業後も帰ってこない」という構図が出来上がっているのである。すなわち、「非大都市圏で生活すること」「階層的上昇移動をする（より高い収入や地位を得る）」ことは、究極的には相容れないのである。

この両者について、一つの折り合いをつける進路として、地方のエリート層である教員という職業があると位置づけられる。「地域密着の専門職」「ローカルティ性が高い」（天野 1986）とされ、全国の津々浦々の人々に必要なもので、彼らを養成する国立大学の教育学部の多くは非大都市圏に存在する。本稿では、このような構図をふまえて、地方国立大学の教員養成系学部在籍する、進路が決定した4年生へのインタビュー調査より、地域移動と階層移動の関連について考察する。

## 1. 調査の概要

調査する都道府県として、鳥取県を設定した。鳥取県は、県内にある4年制大学は3校のみである。これは47都道府県のうちで、鳥根県、佐賀県の2校に次いで少ない<sup>2)</sup>。そのため非大都市圏の典型的な県とみなせる。鳥取県で主として教員養成を行っているのは、地方国立大学の鳥取大学である。いわゆる教員養成系学部・学科として現時点で存在するのは、地域学部地域学科人間形成コースであるが、2017年度に改組される前は地域学部地域教育学科であった。

本研究における調査は、2017年度に鳥取大学地域学部地域教育学科の4年生であった9名を対象とした。地域教育学科の入学定員は49名、2014年4月の入学者は55名で、そのうち2018年3月に卒業した者は51名で、この母集団のうち、「保育・教育実践演習（幼・小）」の受講者から、ランダムサンプリングを行い、対象者を決定した。

調査時期は2017年11月～2018年2月で、調査方法は半構造化の質問によるインタビューで、1人あたり30～40分程度行った。インタビュアーはすべて筆者である。

表1が調査対象者と、主な調査項目、それへの回

答の概要である。表1や、以降の本稿での表記において、以下のように行うものとする。

### ＜インタビューデータの表記について＞

- ・調査対象者は表1にあるA～Iで表す。
- ・インタビュアーは「私」と記している。
- ・都道府県名や大学名で固有名詞が出てくる箇所は、＜地元の県の国立教育学部＞といったように記している。
- ・「地元の県」という場合は、出身の都道府県を指すこととする。

なお、9名のうち1名（I）は教職にはつかないとのことで、この後の分析からは除外した<sup>3)</sup>。

そして、以下の分析における大まかな原則として、2名以上から同じような回答があった内容を中心に行っていくこととしたい。1名からのみと、2名以上から回答があった内容とで、一般性や代表性が大きく変わるわけではない。しかし、1名からのみの回答内容は、その個人のみにしかかわる特殊な事情が影響している可能性があるため、このような基準によって回答を整理することとした。

## 2. 地域移動を規定する要因

本章では、実際の地域移動がどのような原因で起こっているのかについて考察する。最初に大学入学時の地域移動、次に大学卒業時の地域移動を扱う。

### （1）大学入学時の構造的な地域移動

調査対象者のうち、鳥取県内の出身者は、1名（I）で、鳥取県に隣接する県の自宅から通学している者が1名（H）で、あとは全員自宅外生であった。他県の高校を卒業して鳥取大学に進学した理由としては、次の2つのパターンがあった。「大学入試の結果が振るわず、地元の国立大学教育学部を受験するのが叶わず、自分の学力にあった鳥取大学を選んだ」（C・D・E・F・G・H）と、「自宅から通える場所に4年制大学がなかった」（A・F）とである。「自宅から通える場所に4年制大学がなかった」も結局のところ、学力で大学を選んでいるという傾向はあった。以下がC・E・Gの3名の回答である。

表1 調査対象者の概要と主な回答

名前	性別	出身地・自宅所在地	家族構成	大学の志望理由	大学卒業後の進路、その理由
A	女	近畿地方。地方都市だが、自宅から通学可能な大学はかなり限られている。	両親	地元の県内の国立教育学部を勧められたが、にぎやかなところの生活は疲れると思ったので、鳥取を選んだ。「大学生になったら一人暮らしをする」というのは当たり前だった。	地元の県に戻って、小学校教員をやる。教員採用試験を受ける時に、鳥取にするか、地元の県にするかは迷った。鳥取での人とのつながりを大事にしたかったが、友達から「今はともかく、将来的には地元に戻った方がいい」と言われて、戻ることにした。
B	女	中国地方。県庁所在地だが、中心部までは遠い、のどかなところ。地元の県の国立大学は近かったが、県内に大学は少ない。	祖母、両親、弟、妹	親から「あまり遠くに行かないでほしい」と言われていて、地元の国立大学を強く勧めていた。地元の県が隣県の国立大学に絞られて、取れる資格や入試科目を考慮すると、隣県の大学となった。	地元で保育士になる。鳥取でやろうかなともちょっと思ったが、両親から「約束が違う」「帰ってきてくれないと困る」と言われた。
C	女	近畿地方。地方都市で市内に大学がある。京阪神にある大学の一部にも、ぎりぎり通えるような距離。	両親、兄、姉	遠くの大学に行きたい、親から離れたいという意識があった。別の国立大学が第一志望であったが、センター試験の結果を見て鳥大にした。	地元で保育士になる。鳥取にいたいとは思わなかった。兄と姉は地元を出ているので、親からは「帰ってこい」と言われた。
D	男	中国地方の都市。新幹線の駅がある。自宅はJRの駅から近い便利なところ。	両親、妹、弟	実家から離れたいという思いは強かったが、大都市の私学は家賃や学費などを考えて選ばなかった。センター試験の結果で鳥大にした。	教師を目指しつつ、民間企業への就活も行ったが、4年の夏くらいに教員志望を固めた。来年度は講師として、地元の県でやる。祖父母から「長男は家やお墓を守るものだ」と聞いているので、地元でやる。
E	男	中国地方。町自体は田舎だが、家は駅からすぐ近くで便利なところ。	両親、妹。	東京や京阪神の私学に行くなら、経済学部系に行きたかった、国立なら教育学部と決めていて、後者になった。	先輩で民間企業に就職した人もいたので迷ったが、3回生の冬に小学校教員になることにした。教員になるなら地元県しか考えなかったし、母から「帰ってきてくれ」と言われた。
F	女	近畿地方。県庁所在地から離れていて、4年制大学に自宅から通学するのは不可。	両親、姉。	小学校免許が取れる大学を考え、センター試験の点数があまり良くなかったので、鳥大にした。地元を出てみたいという思いは強かった。	関東の国立大学の大学院に進学する。2年間大学院生をして、その後は地元に戻って先生をする。姉が進学する大学院がある県に住んでいることも、決め手の一つだった。
G	女	近畿地方。住んでいる市町村はのどかなところだが、電車で30分程度行くと、地方都市があり、いくつかの4年制大学も通学できる。	両親、妹2人。	隣県の国立教育学部が第一志望であったが、センター試験の点数が足りなかった。浪人する気はなかった。私立も受け、そこしか合格しなければ入学するつもりだった。	教員になるかは、「自分に勤まるか」が不安で、社会福祉士や地方公務員とも考えたが、やはり自分は教員だと決めた。「将来のことを考えて」鳥取で小学校教員になる。
H	女	鳥取大学へ通学可能な場所。	祖母、両親、姉	現役の時も浪人の時も、中国地方の国立大学を目指していたが、センター試験の点数が足りなかった。	鳥取県の小学校教員になる。他のところは考えなかった。
I	女	鳥取市内。	祖父、母、姉、妹（父は病没）	医学部を目指して、仮面浪人をするために入学した。「家から通えて、免許が取れる」ということで、母に薦められて入学した。	卒業後は地元のTV局で働く。アルバイトを通して、興味が出た。都会には出たくなかった。姉と妹が県外に出ていることもあるし、予備校生の時に県外で寮生活を送って、家庭のよさが身に染みた。

私：鳥大の地域学部に入られた理由は？

D：受験した大学っていうのが、＜地元の県の国立教育学部＞と鳥取大学で、どちらも教育学部で受けたんですけど、＜地元の県の国立教育学部＞の受験の時にインフルエンザになっちゃって、で鳥取大学に後期で入った。大学選びの基準としては、教職を取るだろうという感じで、そのつもりで入ったんですけど、自分の中の意識としてはそんなに先生になりたいなという気はなくて、半ば言われるがまま

みたいな感じのところはありますね。

私：鳥取大学地域学部を選んだ理由は？

E：センター試験の結果をみて。ここに来るのも、そんなに行きたかったわけではなくて、センター試験の結果ですね。それと、高校2年生の時のキャリア教育です。自分がなりたい職業でコース分けがあり、何の気なしに教育コースを選んで、そこから教員になろうかと。センター試験の結果で、教員にな

れるのなら、鳥取大学にしました。

私：鳥取大学地域学部の志望理由は？

G：ほんととは＜地元の隣の県の国立教育学部＞に行きたかったんですけど、センター試験の点数が足りなくて、国公立で教育系が学べるところで、自分の点数で行けるところはどこかって考えた結果、鳥取大学の地域学部になりました。

私：＜地元の隣の県の国立教育学部＞を志望したのは、やっぱり近いから？

G：オープンキャンパスに行行って、きれいだし。でかいし。いいなあと思って。

私：＜地元の県の国立教育学部＞とかは考えなかったですか？

G：あー、＜地元の県の国立教育学部＞も考えてたし、志望校を書くところがあるじゃないですか。模試とかで。そういうのにはいつも書いてたんですけど、そこもちょっと（点数が）足りなかったですね。

私：浪人しようとは思わなかった？

G：親も反対していたし、浪人してまでもっとレベルの高い大学に行こうとは考えなかったです。

以上から、大学入学時の地域移動は、自らの意思というより、出身地の特性や試験結果などの構造的な要因の方が多くことがわかった。

また、「機会均等」「平等」が研究の問題関心となる時によくおかれる前提や、社会一般の常識などでよく言われる「お金がないから、大都市圏の大学、とりわけ私立大学への進学をあきらめざるを得ない者がいる。それが不平等だ。」という傾向は、あまり認められなかった。経済的なことは少しは言及されるものの、強くは出てこなかった。次のB・Fがその事例である。

私：関学の教育学部でも…

B：同じクラスからも関学行った子いました。いいなあって思ってた、都会だしきれいだし。

私：いいなあとは思う？

B：憧れはあるんですけど、いざそこに自分が行ってみる？って言われたら、ちょっといいかなあって。でもこんな都会に＜地元の県＞から出ていったら、ちょっとこわいなあと思っちゃってたんで。で、たぶん親に言ってもダメって言われるって思ってたんで。で、私立もダメなんで、国公立の＜地元

の県の地方国立大学＞か鳥取大って言われたら、二択。

私：鳥取大学地域学部を志望して入学した理由は？

F：小学校の教員免許を取りたくて、それが取れる大学ということと、センター試験の点数があまりよくなかったんで、2次試験の配点が高いところ。で、ここの後期入試が総合問題、英語とか苦手だったので、そういう科目で入れるのがいいなと思いました。

私：第一志望は別のところだったのですか？

F：先生に言われて、＜隣県の地方国立大学＞でした。全然私の意志ではなくて。薦められて、言われるまま受けました。

私：＜地元の県の国立教育学部＞とか、関西の大学は考えなかったですか？

F：＜地元の県＞は出てみたいという気持ちがあって、＜地元の県の国立教育学部＞は受けなかったです。関西の大学も入れたらよかったんですけど、国公立と考えていたので、ちょっと私の学力では入れなかったの。

私：関西で、私学で小学校免許が取れるところは考えなかったですかね？

F：うーん、ちょっとは考えたんですけど、なんか私学に行くっていうのが、まあ家のこともありますし、私学に行く人は指定校推薦の人が多くて、やっぱり私は受験で、それとは違う風に、国公立を受けていきたいなと。

私：つまり、経済的なことと、指定校推薦の人と一緒に嫌だなと。

F：そうですね。

## （2）家族を要因とした出身地への志向

続いて、大学卒業時の地域移動、すなわちどこで教員になるかを決めている要因は何かを探る。

分析対象者の8名（調査対象者のうち教員にならない1名は除いた）のなかで、鳥取県で教員となるのは2名である。この2名のうち、1名は隣接する県から鳥取大学に通っていた自宅生（H）で、もう1名は自宅外生（G）であった<sup>5)</sup>。あとの6名は、すべて地元に戻るというパターンである。（大学院卒業後に地元で教員になるという予定を持つ1名も含む。）地元に戻る理由としては、「親の希望」という者が最も多かった。B・C・D・Eの回答は以下



のとおりである。

B：(卒業後の就職先について) 鳥取でもいいかなって思ったんですけど、両親から約束が違うぞって言われて。長女なんで帰って来てくれんと困るって言われて、で、＜地元の県＞で。弟が単身赴任系の仕事についてるので、高校卒業してからすぐもう就職したので、私が家の近くにいてくれた方がうれしってという話はされて。で、弟はもう家には帰らないって言って、妹も今大学生なんですけど、もう＜地元の県＞には帰らないって言うてるので、私が帰らんとっていうのは思ってた。

私：親の介護とか、イエ制度について。

C：今、兄も姉も結婚して実家から離れているので。それもあって家に帰らないとなってるのはあったんですけど、跡取りとかはなんか絶対兄がしないといけないのかも考えていないです。

私：親御さんは「あんただけでもいいから一時的にでも帰ってきてくれ」とかそういうのが？

C：ありました。

私：それは3人とも出て行ってしまったら寂しいとか？

C：うーん、寂しいと。

私：親御さんの希望もあったということですね。

C：はい。

私：長男だから、介護とか家、土地、墓をある程度意識されているという。

D：祖母がまだしっかりしていた時には、家を継ぐんだぞみたいな話をいっぱい受けてましたね。両親が共働きというのもあって、だいぶ育児の方とかを祖父母の方に委託していた関係もあって、小学校の低学年ぐらいまでは、祖父母からまろに影響を受けてましたね。で、その時にね、もう家の話だとか、分家のポジションなんだよとか、こういう地域に住んでるんだよとか。お墓のところに連れて行かれました。ここには誰々の墓があって、こっちに親戚の墓があって、っていう話をもう墓参りの度にしきりにされていたので、もう染みついていますね。おそらくその家の意識っていうのも僕の中で強いんだと思います。ちょっと嫌だなと思いつつも、小さい頃から受けているので。あんまり僕としても好きじゃないけど、仕方ないのかなと思います。

私：講師になるのは、どこでやられるのですか？

E：＜地元の県＞です。

私：地元でやりたいということですか？

E：大学で学んで行くなかで、地域教育とか学んでいく中で、その土地の知識は必要なのかなと感じたので、できれば地元と考えています。

私：鳥取というのは考えなかったですか？

E：考えなかったですね。

私：どういう理由ですか？

E：うーん、なんか、土地柄的にはすごい好きなんですけど、両親、特に母親が帰ってきてくれと言っていて。

私：なぜ「帰ってきてくれ」なんですか？

E：うーん、なんででしょう。母親のなかに、自分のやりたいようにやってほしい人で、母親のなかに、僕の人生設計として、鳥取大学に行って、＜地元の県＞の先生になるという人生設計が出来ていて、それから外れることを許さないというか。地元自体は好きなので。

私：親の介護とか、家・土地・お墓とか、いわゆる「跡取り」、そのあたりはいかがですか？

E：長男だから、介護とか、家のことをやるんだなという意識はありますね。それを妹とか両親とかと深く話す機会はなかったんですけど。妹がだぶん＜地元の県＞を出るんです。大学も関東に行っているんで、そっちの方で就職するので。僕は＜地元の県＞に戻るんで、僕になるのかなと。

大学入学時の進路選択でも家族の意向が働いている場合があるが(Bなど)、卒業の就職地において、親の意向が強く表れるケースが多いと言える。これらのケースは、さらに次の2つに分類できよう。長男長女であるから「跡取り」という、伝統的なイエ制度に基づいた意識というパターン(D・E)と、「きょうだいの誰かいる(残る、帰る)」という意識のパターンである(B・C)。

### 3. 地域移動に対する意識

本章では、実際に地域移動をおこすまではいいが、心の中で持っている地域移動に対する意識を取り上げる。「都会へのあこがれ」と「流動志向」の2点が、2名以上に共通した内容として挙げた。

### (1) 大都市へのあこがれ

東京や京阪神などの大都市へのあこがれを口にする者は多かった。マス・メディアは、大都市にある飲食店やイベントについての情報を毎日のように流しており、その影響が大きいのである。しかし、大都市は「住むところ」ではなくて、「行くところ」という意識が強いようである。鳥取県で教員をすることになったHは、以下のように述べている。

私：都会へのあこがれですが、TVで東京のこととかが出てきたら、そこから憧れるということですか？

H：そうですね。今住んでいるところは、へき地ですけど、テレビ番組は大阪、神戸らへんの話ばかりで、「ああ、いいなあ。大阪に住んどったらこんな普通なんだろうな」という気持ちは、すごくあります。高校の時とか、大学進学する時は、ありましたね。

私：毎日のテレビ番組でそういうのを見ているわけですね？

H：はい。朝のニュース番組で、今日オープンしたどこそこで、こういうキャンペーンやってます、というを見て、「はい、行けませーん」というのは…それは今でも感じます。

私：レストランとか？

H：そうですね、レストランとか、ビュッフェとか。祭りとか。「今日はここで花火大会あります」と言われても、「はい、行けません。」みたいな。

私：でも、住みたいとは思わないと。

H：そうですね。行きたいとは思うけど、住もうとは思わないし、旅行感覚で行くくらいでいいです。

実際の進路選択において、実際に大都市に移動する者は1名(F)だけであった。以下のような事情である。

私：4月からは？

F：関東の大学の大学院に進みます。今いる研究室の先生から、大学院を考えてみないかと言われて、私もすぐ(先生として)就職するよりかは、大学院でやってみたいと思いましたので。

私：どうしてその大学に進もうと決めましたか？

F：「行きたい先生」がいらっしゃるので、そこに行こうと思います。

私：関東に行くというのは、遠いですけど、気にはなかったですかね？

F：ちょうど姉が同じ県に住んでいるので、親も安心かと思って。

私：大学院を終わったら、どういう進路を考えていますか？

F：地元に戻って、小学校教諭を考えています。

私：なぜ＜地元の県＞でやろうと考えますかね？

F：教員になるってなった時に、やっぱり知っている土地というか、地元がいいかなと。

私：それは、大学入る時も、4回生で進路を選ぶ時も、ゆるぎなかったということですね。

F：そうですね。

私：先生になったら、基本的には＜地元の県＞にいいようかな、という感じですか？

F：はい。

私：チャンスがあればほかのところに行きたいとかは？

F：あまり考えてないです。

また、大都市を自分の能力を発揮できる「チャンス場」ととらえている者もいた。社会移動論で一般的に語られる論理に近いが、少数であった。

私：大都市に行ってみたいとかはないですか？

E：うーん、本当にチャンスがあるんだったら、例えば大阪とか関西圏には行きたいなという思いはありますが、教師として出ていくのは嫌というか。

私：ビジネスの世界でやっていくなら、大都市でということですね。

### (2) 流動志向

「家族」を要因として出身地で今後の人生を過ごしていくつもりでいるが、人生のどこかで、一時的であっても出身地を出たいという希望は、何人かの者が述べていた。今後の人生は、どうせ出身地に縛られるのだから、直接親の介護とかが必要ではない時期に、大都市や海外に住んでみたいという志向である。前述した大都市に移動する1名(F)も、将来的には出身地に帰る希望を持っていたので、「流動志向」の一例といえよう。

私：親の介護、老後、家、土地、お墓だとかはBさんが意識してらっしゃると？

B：やらんといけんかなと思ってるんですけど、まだ家を継ぐっていうのがどんなもんかっていうのをイメージつけてないんで、学生なんで。これから考えんとなとは思ってるんですけど、私が継ぐっていうのは頭の中にはあります。

私：長期的な将来設定ですね。＜地元の県＞で保育士さんをやって＜地元の県＞で生きていくといった形ですね。

B：はい。でもちょっと介護とかいうのがちまちまから、ちょっと出たいっていうのはあるんですけど、なんでなんとかして結婚とかの機会にちょっとなんかこう遠のく理由ができたかなとは思ってますけど。

私：一時的にちょっとこう、、、

B：はい。べったりにならないように。何か理由つけて離れたいなど、いい距離を保ちたいなどとは思ってるんですけど。

私：将来、配偶者にくっついてついていくかもしれないけど、場合によっては親のそういう、お兄さんとかお姉さんも遠くとかだったら、今よりかはある程度は重視して将来を考えようとか？

C：そうですね、ちょっとは考えますね。そこまで重視しないかもしれないですけど。親が病気とか、介護が必要になった時には離れられないと思います。

私：ごきょうだいの間でも、そんなことになったらお前がやれとかそういう話も？

C：いや、だれがやれの話はないですね。そうなったら3人でやっていこうという話です。

私：今後の人生でも例えば、東京に行くかもしれないし、海外に行くかもしれないし、そういうのも？

D：チャンスがあればやってみたいなどは思いますね。僕自身も一年休学してて、インドネシアで日本語の講師とかをしていたこともあって、だからいろんなところに行きたいなという意欲はあるわけですけど、やっぱり長男というポジションですね。で、祖父もちょっと認知症にかかっているんで、母親の方もそろそろ仕事を辞めるという風になってきているので。てなった時に、弟は県外の大学に行っているんで。で、支えたくないと思う反面、戻らなきゃいけないなという使命感めいたものもあるんでしょう。

## 4. まとめと考察

### (1) 調査結果のまとめ

以上のインタビュー結果から、教員志望学生の地域移動の実態や希望は、「センター試験の結果をふまえて地方国立大学の教育（系）学部を選び、親の意向をふまえて地元に戻って教員になるが、一生のうちどこかで一時的に地元を離れてみたいとは考えている」というパターンが多いことがわかった。

地域移動を規定するという要因として、家族に対する意識は大きい。「親の近くに居住する。将来的に介護が必要になったら、自分がかかわる。」という規範が強いことがわかった。この家族に対する意識は、羽瀨（2016）が指摘した「現代的イエ意識」に近いものと考えられる。羽瀨は青森県の若者にインタビュー調査を行った結果、「家長の統率のもとに、家産にもとづいて家業を経営し、非血縁者をあととり養子にしてでも、先祖から子孫へと世代を超えて家系が存続繁栄することに重点をおく」といった伝統的なイエ制度とは違う、「『親の世話をする』ということなどから『イエを継ぐ』という意識を持ち、親子の関係を家系の連続性として意識している」という規範意識があると見出し、「現代的イエ意識」と名付けた。

近年の社会科学でよく言及される「社会関係資本」という概念においても、ほぼ同様のことは指摘できるであろう。「地元の県に住む」という選択は、家族とのつながりを一種の社会関係資本ととらえていて、大都市に出る、あるいは大学所在地に止まるより地元にいることの方が、メリットがあると考えていると推測できる。

また、階層的上昇移動と地域移動との志向の関連性、すなわち「大都市に出て、より高い地位や収入、より豊かな生活を得ようとする」という志向性は、あまり見出せなかった。一つの解釈として、「教員志望で、教員養成を行う非大都市圏の国立大学に進学した」という時点で、大都市圏への移動は視野に入っていないともいえよう。この点は、「大都市で教員をしてみたい」という者は一人もいなかったことに、象徴的に表されている。「出身地で暮らしたい」というのがまずは先にあり、その後に「地方エリート」である教員志望という職業選択があった可能性がある。

しかし、大都市へのあこがれがないわけではな



い。地域移動に関してみられた「流動志向」は、家族への規範意識に伴う出身地への志向と、階層的上昇移動をしたいという志向の、一つの共存のあり方と考えられる。教員志望者に内在する一つの思考パターンといえよう。

## (2) 結語

### 一 家族に関する規範意識をどう評価するのか—

最後に、教師教育と関連する視点を提示する。本研究からうかがえるのは、教員になる者は家族（家庭、イエ）や故郷（地元、郷土）を積極的に評価しているということである。このような意識は、教員が行う日々の教育実践（例えば、道徳教育など）において、価値として児童生徒に伝達されることは、想像に難くない。家族や故郷について、実態が大きく変化し、多種多様な価値観があるなかで、このような評価は、「一面的」「保守的」とみなされる危険性を含んでいる。一方で、このような規範意識を、「非大都市圏の地域の存続のためには、必要な価値だ」と肯定的にとらえる解釈もあり得よう。「地域と教育」という枠組みからの検討が必要と考える。今後の課題としたい。

### <参考文献>

- 阿部真大 2013『地方にこもる若者たち 都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新聞出版
- 天野郁夫 1986『高等教育の日本的構造』玉川大学出版部
- 浅野智彦編 2006『検証・若者の変貌 失われた10年の後に』勁草書房
- 羽瀧一代 2016『現代的イエ意識と地方』川崎賢一・浅野智彦編著『〈若者〉の溶解』勁草書房、pp. 85-109
- 朴澤泰男 2016『高等教育機会の地域格差—地方における高校生の大学進学行動』東信堂
- 樋田大二郎・樋田有一郎 2018『人口減少社会と高校魅力化プロジェクト —地域人材育成の教育社会学』明石書店
- 石井まこと・宮本みち子・阿部誠編 2017『地方に生きる若者たち インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社
- 石倉義博 2009「地域からの転出と「Uターン」の背景—誰がいつ戻るのか」、東京大学社会科学研究所・玄田有史・中村尚史編『希望学3 希望をつなぐ 釜石からみた地域社会の未来』、東京大学出版会、pp. 205-236
- 石黒格・李永俊・杉浦裕晃・山口恵子 2012『「東京」に出る若者たち —仕事・社会関係・地域間格差—』
- 小林雅之 2009『大学進学の世界 均等化政策の検証』東京大学出版会
- 吉川徹 2001『学歴社会のローカル・トラックス：地方からの大学進学』世界思想社

- 轡田竜蔵 2017『地方暮らしの幸福と若者』勁草書房
- 三浦展 2010『ニッポン若者論 —よさこい、キャバクラ、地元志向』ちくま文庫
- 難波功士 2012『人はなぜ〈上京〉するのか』日本経済新聞出版社
- 鳥取大学部ホームページ <http://www.rs.tottori-u.ac.jp> (2018年8月30日アクセス)

### 注)

- 1) 本研究において「教員」とは、小中高等学校の教員と、保育所で働く保育士を指すこととする。
- 2) 2018年度学校基本調査速報値より (<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/file-download?statInfId=000031738712&fileKind=0>, 2018年9月28日アクセス)。なお、東京都は138校、大阪府は55校の大学がある。
- 3) なお、2007年度～2015年度の地域教育学科の卒業生のうち、教員・保育士になった者の割合は60%であるので、それより本調査の対象者は、教員就職率が高いといえる (<http://www.rs.tottori-u.ac.jp/faculty/career/index.html>, 2018年9月28日アクセス)。
- 4) 2014年度に鳥取大学地域学部に入学者のうち、鳥取県出身者は59名 (28.2%) である (<http://www.rs.tottori-u.ac.jp/faculty/system/index.html>, 2018年9月28日アクセス)。母集団においても県内出身者の割合は少ないが、本調査の調査対象者においてはさらにその割合は少なくなる。
- 5) この学生が就職先として鳥取を選んだ理由は注目される。インタビューでは回答があったが、「詳細は記述しないでもいい。論文等に記載される場合は『将来のことを考えて』という文言にしてほしい。」という依頼があったので、表1でもこの文言のみを記載し、分析からも除外している。